

令和7年度第2回  
札幌市環境教育・環境学習基本方針推進会議

会 議 録

日 時：2026年1月20日（火）午後2時開会

場 所：札幌市環境プラザ 環境研修室1・2

## 1. 開会

○大沼会長 それでは定刻となりましたので、ただいまから令和7年度第2回札幌市環境教育・環境学習基本方針推進会議を開催いたします。

本日は、雪の中、また年度末でお忙しい中お越しくださりありがとうございます。まず事務局からご連絡をお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） 環境政策課長の飯岡でございます。委員の皆様方におかれましては、大変お忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

まず、委員のご出席状況を確認させていただきたいと思っております。本日は石澤委員がご欠席、有坂委員が遅参される可能性がございますが、ただ今のところはお不在の中で始めたいと思っております。また坂本委員はオンラインでのご参加ということで、どうぞよろしくをお願いいたします。

計12名のご出席ということになり、委員数14名に対して過半数に達してございますので、推進会議開催要綱第5条第2項の規定によりまして、本会議が成立していることをご報告いたします。

それでは議事に先立ちまして、札幌市環境局環境都市推進部長の吉田よりご挨拶を申し上げます。

○吉田環境都市推進部長 環境都市推進部長の吉田でございます。開会にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。

委員の皆様方におかれましては、年明けの慌ただしい中、加えましてお足元の悪い中、お集まりいただきまして本当にありがとうございます。また日頃より、本市の環境教育行政に対しまして、多大なるお力添えを賜っておりますことを、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

さて1月も下旬に差し掛かり、令和7年度も残すところあとわずかとなりました。今年度は札幌市小中学校環境教育研究会および株式会社アドバコムとの環境教育に関する連携協定の締結や、環境副教材のデジタル化事業を開始するなど、札幌市の環境教育において大きな転換点になっているとも感じているところでございます。

一方、昨今の気候変動の問題は、もはや待ったなしの状況にあります。札幌市が掲げます「ゼロカーボンシティの実現」には市民一人一人の意識と行動の変容というものが不可欠になります。

次世代を担う子どもたちをはじめまして、市民の皆様に向けて、自分事として響く実効性の高い環境教育の必要性が高まっており、委員の皆様のお力添えのもと、引き続き、よりよい環境教育のあり方を探ってまいりたいと考えているところでございます。

本日は、限られた時間ではございますが、忌憚のないご意見を賜りますようお願い

申し上げます。

これをもちまして、開会の挨拶に代えさせていただきます。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） 以上でございますので、大沼会長、議事をよろしくお願いいたします。

## 2. 議事

○大沼会長 それでは議事に入らせていただきます。

本日の議事は1つです。環境教育関係事業について、ということで事務局からご説明お願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） まず、資料の確認をさせていただきたいと存じます。本日お配りしております資料でございますが、会議の次第、資料1として委員の名簿、資料2として環境教育関係事業についてでございます。

その他の参考資料としまして、一つ目に冬休みエコライフレポート2025、二つ目として、環境教育・環境学習ガイドをお配りさせていただいております。不足がある場合にはご連絡いただければと存じます。

それでは議題1の、環境教育関係事業につきまして、ご説明をいたします。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 環境教育関係事業について、ご説明をさせていただきます。

こちらの目次にマークがございますけれども、環境局の事業は私から、「教」と書かれた教育委員会の実施事業は村井係長から、「プ」と書かれた環境プラザの事業については上杉係長からそれぞれ説明させていただきます。また、これから「何ページをご覧ください」と申し上げた際は、各スライドの右下に振られたページ番号をご覧ください。特に、紙資料をお持ちの方については、1枚の紙の両面にスライド4ページ分が印刷されておりますので、ご留意くださいますようお願いいたします。

本日は時間が限られておりまして、資料の全ての説明を行うことができないため、今年度のトピックや課題点など、要点を中心にお話させていただきますことをご了承ください。

まず2ページをご覧ください。冒頭の「はじめに」という枠で囲んだ部分は、2019年に改定した札幌市環境教育・環境学習基本方針の取組の四つの柱を示したものです。

この環境教育関係事業は四つの取組に基づいて実施しています。一つ目が、学校などの教育機関等で行われる環境教育の推進、二つ目が、環境人材の育成、三つ目が、環境教育・環境学習の場と機会の充実、四つ目が、普及啓発のための情報の発信・広報と行動の後押し、となっております。

資料の3、4ページには、各取組の具体的な内容について記載しています。

これから本市で行っている各事業を、これら四つの取組に分類し、取組ごとに、これまでの実施状況と今後の予定について説明いたします。

まず（1）の学校などの教育機関等で行われる環境教育の推進と、（2）の環境人材の育成を一括でご説明させていただきます。

資料の5ページをご覧ください。最初に、「ア 環境副教材・教師用手引書」で

す。

こちらは今まで小学校の児童に紙冊子により配布していたものですが、昨今、学校現場でタブレット端末を使った学習が進んでいることや、学校での紙冊子の配布が教員の負担になっていることなどに鑑みて、ワーキンググループの先生方のご意見や、学校の先生向けのアンケートに基づいて、デジタルブック化する作業を進めているところです。

またこれに合わせて、副教材は今まで学年別で2年間使用してもらうことになっていましたが、それに伴う学校での管理の負担軽減や、教材としての活用性の改善のために、現行の学年別の内容を、例えば水道とか下水とかごみといった分野別に再編しているところです。

次の6ページをご覧ください。ここにイメージを載せておりますが、この左側の絵のとおり、日々非常にお忙しい先生方にとって、例えば下水だとか水道とかごみといったように、新しい単元の授業を行うたびにそれに関連する資料をいちいち自分で探さなければならず、それが現場負担になっていると聞いております。

また紙の副教材だと、例年4月に配布していることもございまして、例えば10月とかに副教材を使用すべきタイミングにおいて、先生の手元に副教材がなかったりだとか、あるいはその存在が頭から抜けていたりということで、使われなくなるということも問題点として挙げられました。

それをデジタル化、分野別化したのが右のイメージです。例えば副教材のリンクを先生が使っているタブレット端末のブックマークに貼ってもらうことで、まず先生方に副教材の存在に気がついてもらいやすくなります。

その上で、どの単元の授業を行うにせよ、まずはブックマークから副教材に入ってもらって、その中から必要な分野を選んでいただくというような、いわゆるポータルサイト的な使い方をしてもらえればなと考えております。

副教材の各ページでは、各分野の基本的な内容が学習できる他、その内容に係るホームページやパンフレットなどのリンク先のアイコンが貼られていますので、例えば水道のホームページだとか、そのパンフレットをいちいちネット上で検索して探さなくても副教材上のアイコンを押すとすぐにたどり着いてそこで深掘りした内容の学習をすることが可能となります。例えば処理施設の機械が動いている様子や、あとはそこで働いている職員のインタビューなどの動画をアイコンとしてつけたり、学習内容を確認するためのクイズを設けたりするなど、デジタルブックならではのコンテンツを追加することも可能になっています。

また、仮に学校とか先生の事情で副教材が使われなかったとしても、児童のタブレット端末にも同様のブックマークを貼ることで、例えば子どもたちに自習時間や何かのきっかけで、副教材を見てもらって内容に興味を持ってもらうことも期待できると思います。

制作スケジュールですが、今年度はまずワーキンググループの先生方に分野別に書き直していただいている原稿を整理して、これを電子原稿として落とし込んだり、アイコンに貼り付けるための動画などのコンテンツを制作するところまでを行

います。これらの電子原稿やコンテンツをもとに、来年度に実際にデジタルブック化して令和8年の9月頃には公開できれば、と考えているところでございます。

では次に、「イ 環境教育のクリック募金」です。7ページをご覧ください。

専用ホームページの閲覧数に応じて、7社の協力企業からご寄付をいただいて、それをもとに環境教育教材を購入し、希望する小・中学校に寄贈しています。本日も参加の北海道ガス株式会社様も協力企業の一つとなっております。

次の8ページにあるとおり、今年度は93校の応募がありまして、寄付金額を大きく上回ったことから、抽選で67校に寄贈いたしました。

寄贈された教材がどのように活用されたかの報告書も掲載しておりますので、あわせてご覧いただければと思います。

次に、「ウ エコライフレポート」です。9ページの概要に記載しておりますとおり、夏休みや冬休みを前に、市立小中学校の全児童生徒に対して、家庭で取り組むべき行動を選んで実践できるチェック表を配布する事業です。

資料10ページから12ページにかけて令和7年の夏休みの取組結果を掲載しております。10ページにあるとおり、全体の取組率が86.9%と、前年同時期に比べて若干改善いたしました。11ページは、よく取り組んだ項目などを取組率ランキング順に掲載しております。これを見ると、節水やリサイクルなどは特によく行われているということがわかるかと思えます。また、この中の自由記述欄で書かれたものを実際に抜き出したのが12ページで、前回の推進会議でのご意見に基づきまして、多めに掲載しております。

次に、この冬休みの取組についてです。13ページと、お手元に現物をお配りしているのでご覧ください。前回の推進会議でご意見いただきました地産地消の取組を5番として追加しております。

また、小学生分だけではありますが、こちらも前回の推進会議でのご意見に基づいて、保護者向けアンケートの2次元コードを追加して、Googleフォームで回答してもらうようにしました。これまで回答いただいた内容を一部資料に掲載しております。例えば子どもにエコや環境について意識させる良い機会になったとか、子どもが意識付けて継続して行動してくれるよう毎日取り組みたいというご意見があった一方で、以前レポートに載せていた毎日丸付けをするチェック表、これは前回か前々回ぐらいからなくしていたのですが、それを復活させてほしいというお声もいただいたところです。

次に14ページの「エ 校外学習用バス」についてです。

環境に関する体験学習の場の提供を目的に、市内小中学校を対象に、校外学習用バスの手配を行っているものです。

令和7年度は、行先施設の近隣でヒグマが出たことなどによるキャンセルもございましたが、全部で31校が利用しています。15ページには利用校からの報告書を載せております。

16ページには、バス事業が抱えている問題を四つ載せております。

一つ目が事業の意義というところで、本来環境教育のためのバスであるところ、

環境教育の視点が抜けてしまって、申し込んで当選すればバスが使える、と思われる学校もあるんじゃないかということ、報告書の内容から感じております。

二つ目が経費、事業者手配で、これは以前の会議でも述べさせていただいたことですが、コロナ禍におけるバスや運転手の減少ですとか、物価高の影響などから、バス事業者やバスの台数の確保に苦慮しているというところがございます。

三つ目は実施時期で、学校からのニーズは、夏の7月から9月などが多いのですが、これらの時期は観光や修学旅行などでバスの確保が難しく、やむなくバスに比較的余裕がある10月下旬から12月に実施しているところ、学校からはインフルエンザなどの感染症流行期を避けることなどを理由に時期を早めることはできないか要望いただいているところ、です。

四つ目の学校からの行き先変更ですが、これは実施時期の問題とも重なりますが、水道記念館とか定山溪ダムなど11月中に閉館してしまう施設の見学を12月に利用すると申し込んでしまい、後で気がついて変更するというところで調整が負担となっている現状がございます。

事前に学校に対しては、施設の開館状況をきちんと確認してから申し込んでくださいと周知してはるんですけども、これをよく確認しないで申し込む学校が後を絶たず、今年度は特にそれが目立って多かった状況でございます。これらについて、よろしければ学校の先生からコメントをいただければ幸いです。

次に、「オ 学校での出前講座の実施」についてです。17ページと18ページです。

札幌市では、市民への情報提供と対話の一環として、市職員が依頼に基づいて地域に出向いて説明を行う出前講座を実施しています。実施結果については資料をご覧くださいと思います。

次の「カ 環境に関する全園、全校の取組」については、村井係長から説明をお願いいたします。

○教育委員会（村井企画担当係長） 札幌市教育委員会の村井と申します。座ってご説明させていただきます。

今年度も雪・環境・読書、特色ある学校教育ということで、環境という部分で、さっぽろっ子環境ウィーク期間を設定し、全ての市立の園・学校で、エコスクール宣言校として取り組んでいただいております。

今年度多かったのは、写真も載せておりますが、小中学校が連携した清掃活動が、昨年度と比べると増えてきているように思っております。子どもたちが生徒会だったり児童会だったりとして連携しながら取り組んでいる自主的な活動ということで目立っております。

また、授業でも、いろいろな環境に関わる学習を行っておりますが、やはり先生方も「ここは環境教育と繋がっているな」というところが今後大事になってくるのではないかなというように意識しておりますので、来年度も基本方針は変わりませんが、各学校でやっていることをよりしっかりわかるように、学校とも連携して取

り組んでまいりたいと思っております。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） （1）の学校などの教育機関等で行われる環境教育の推進の説明は以上です。

引き続き（2）の環境人材の育成の説明をさせていただきます。まず、環境プラザの事業が続きますので、上杉係長から説明をお願いいたします。

○環境プラザ（上杉係長） 環境プラザの上杉と申します。座りながらになりますのご説明させていただきます。よろしく申し上げます。

まず「ア 環境保全アドバイザー・環境教育リーダー派遣」につきましてご説明いたします。20ページをご覧ください。

概要としまして、記載のとおりであります。今年度につきましてはアドバイザーの方が現在8名、リーダーにつきましては24名の登録があります。それぞれ講演会ですとか、実際の野外に出てフィールドでの自然体験活動においてそれぞれ様々な場面での環境分野の活動の補助的なところで、活動いただいております。

今年度の結果と今後の予定という部分になります。例年、川での自然観察、自然体験活動がやはり多く、全体の半数以上の依頼が川での活動というような状況となっております。件数も多く飽和状態になってきていますので、同じフィールド、川と言いましても限りある資源の中での活動になりますので、やはり同じところで複数回自然体験活動を繰り返していくと、自然への負荷も増えていくだろうというリーダーさんの意見等もあり、実際に使用するフィールドに関しては今後きちんと選定をしていく必要があるかなというところで考えています。

その中で我々としても、札幌という近くに山や川、自然が多いというフィールドを生かして、体験機会の多様化を促すきっかけとなる事業を検討したいというように考えております。

その他、小学校、幼稚園、保育園の依頼が多く、参加者が若い児童が多いというところで安全管理面での留意点が多くあります。講師の皆様と共有した上で利用者の希望に沿ってそういった支援を今後も継続していきたいというように考えております。

今年度の実施件数につきましては下にあるとおり、アドバイザーについては24件、リーダーの派遣件数については46件ということになっております。12月末現在の数値になります。ほとんどの予約について派遣が終わっているので、この後の活動件数としては、増えても2、3件と見ています。

続いて21ページの「イ こどもエコクラブ」です。こちらにつきましては、日本環境協会が実施するこどもエコクラブの札幌事務局として、登録団体への情報提供や、交流会を実施している他、環境プラザとしても主体となってさっぽろあそエコ団の運営を行っております。

令和7年度の結果と今後の予定ですが、今年度のこどもエコクラブ交流会につき

ましては、各クラブの活動報告後に札幌市豊平川さけ科学館にて施設見学ツアーとさけの採卵体験プログラムに参加してまいりました。市内の川を遡上してくるさけを実地見学した他、施設内の展示や、実際にさけの腹をさばいて採卵実習するなど、こういった川に触れるだけではなく、どういう生態で魚が増えていくのか、どういう川で魚が育つのか、そういったところを学びながら、クラブ間の交流を行うような形でした。

今後もクラブ間の交流と合わせて様々な自然体験活動を加えていきたいと考えております。

続いて22ページの「ウ 指導者向け研修」になります。こちら、今年度は来月2月に実施予定となっております。

先ほど講師派遣制度のところでもお話をさせていただきましたが、実施主体の方で、自然体験活動の多様化を考えるというところで、今回、北海道立総合研究機構の林業試験場から速水氏を招きまして、環境プラザの環境研修室で講座を実施しようと思っています。

内容としまして、道産材や植物標本制作の実践を通じて札幌圏の自然資源を教育プログラムとして昇華させる実践的なスキルを、というように書いておりますが、具体的には、防風林を取り上げて、身近なところある防風林が実は生態系を守るために大事な役割を果たしているんだよ、ということ、指導者側である学校の先生ですとか、放課後児童館の職員等に向けてお話をし、今後の自然体験活動に繋げていきたいというように考えております。

掲載してる写真は、今年度さっぽろあそエコ団で取り組んだ防風林の中での体験活動です。左側の写真から、風力計を実際に使ってみて、通常の外での風速と防風林に入ったときの風速の違いを感じて、数値化し、どれだけ防風林が役立っているかということを感じてみたり、その場その自然の中で、落ち葉を拾って標本を作っていくというような活動をしてまいりました。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 次いで23ページの「エ 環境教育・子どもワークショップ」について説明いたします。このワークショップは令和2年度にコロナ禍の中で始まったもので、本部のメインファシリテーターから児童会館の各会場にオンラインでプログラムを配信して、各会場では現地のファシリテーターの誘導によって、子どもたちが対面によってコミュニケーションをとるとともに、オンラインで各会場との意見交換をするなど、オンラインと対面をミックスして行うものです。

あわせて、環境教育に興味があって、ワークショップなどのスキルを身に付けたい高校生、大学生などのユース世代の人材育成を兼ねておりまして、希望する方を対象に、ファシリテーターなど育成研修会を実施して子どもワークショップの運営スタッフの一員として活動してもらっています。

次の24ページのとおり、今年度は来月2月21日に5ヶ所の児童会館で行う予定です。

このワークショップは、オンラインによって普段対面で会えない人と意見交換でき、参加した子どもたちの満足度が高い一方で、課題があってその見直しを考えているところです。

まず児童会館の利用者は低学年が多いということもあり、プログラムをそれに合わせたレベルに落としたり、時間を短くしたりせざるを得ず、結果として学びの質や量に制約が生じてしまうという点です。

次に経費の問題で、去年までは1日につき5ヶ所、2日間で10ヶ所の児童会館で行っていたところ、経費の増加によって、1日5ヶ所のみでの実施に留まっている状況です。オンラインの場合、どうしても現地に通信機器や人員を配置せざるを得ず、費用負担が大きくなっている状況です。

あとは実施回数の減少にともなって、ユースの現場経験が限定的になっている点も課題として挙げております。

これも後ほど、よろしければ意見をいただければ幸いです。

次の「オ 教員に向けた研修」については、村井係長からお願いいたします。

○教育委員会（村井企画担当係長） 「オ 教員に向けた研修」についてです。昨年度同様、令和7年度も三つの研修を行いました。

参加した先生方の声として、「今回の研修で円山動物園の見どころや事業の切り口にできそうな視点が広がりました」、「今回の研修を経て、学習で円山動物園を利用したいと思いました。」、「インターネットで見るだけではなく実物を実際に見て感じることで、感動が得られることの大切さがわかりました。」、「子どもたちにもこのような感動をさせてあげたいです」など、先生方が実際に円山動物園に行ったり動物園に関わる人からお話を聞いたりすることによって、子どもたちに授業に活かしていきたい思いがたくさん生まれておりました。

満足度ですとか、この研修を十分活用したいというところは、ほぼほぼ100%活用したいになっており、満足できた以上の十分満足できたという項目も、80%以上になっています。

このような研修によって子どもたちに教育として繋げられるように今後取り組んでいけたらと思っております。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） （1）と（2）の説明は以上になります。

これから皆様が発言いただく際は、それぞれのテーブルの真ん中にマイクを置いてありますので、ご発言のときはそれぞれ譲り合って使っていただければと思います。よろしく願いいたします。

○大沼会長 ご説明ありがとうございました。いろいろ議論が多岐にわたると思うのですが、時間も限られておりますので、大きな変更があるかもしれない案件に絞って議論をいただければと考えております。

まず一番大きな変更がありそうなものとして、(2)の環境教育・子どもワークショップです。ご説明どおり、いわゆる若い方のファシリテーターによる1時間のオンライン繋げのワークショップというものから、24ページでの内容によれば、もう少しゲーム形式にするという形で短時間で自発的に学べるものにしてはどうかというご提案がありました。また、児童会館だとどうしても低学年に偏ってしまうということで、高学年、できれば中学生にも参加できるようなそういったチャンネルも作りたいという話もありました。それからどうしてもオンラインに繋いでやるとコストがかさむとそういう部分もあり、おそらく運営側のスタッフの方も大変だということだと思いますが、今後どのように見直していくかというところが一番大きいかなと思います。まず、こちらについてご意見いただければと思います。

2点目に、環境副教材につきまして、オンライン化はもう既に今年から入っているということですが、今年9月にはデジタルブックレットがリリースということで、それに向けた準備状況や改善点あるいは現場の感触などを学校の先生からもちょっとお伺いできればと思います。

それから3点目に、校外学習バスで、なかなか限られた時期、限られた予算に限られた数の中でのやりくりということで、よりよい工夫の余地がないかということで、この点についてもご意見いただければと思います。

あと時間が許せば、エコライフレポートです。皆様のご意見をいただきまして改善し、保護者のご意見をいただいたりしていますので、時間との相談になりますけれども、ご議論、ご意見、ご提案をいただければと思います。もちろんそれ以外の点についても、時間の許す限り、ご議論、ご提案、ご意見等いただければと思っております。

ではまず、環境教育子どもワークショップについてご意見やご提案、単にいいと思う、よくないと思うなどでも結構ですので、どなたからでもご意見をいただければと思います。

では先名委員、お願いいたします。

○先名委員 先名です。環境教育子どもワークショップにおける、令和8年度の予定の上から四つ目、開催形式に関する課題というところで質問させてください。

こちらの費用の負担が大きいという部分で、一番今大きく感じてるものは何でしょう。PCのリース代なのかWi-Fiの契約代なのか、もしくは場所代なのか講師代なのか、そのあたりを教えてくださいませんか。

○大沼会長 事務局から、お願いします。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 全体的にというところですが、特に多いのが講師の費用というのがありますし、あとは、例えばオンラインではなく1ヶ所でやれば機材を使わなくていいところ、5ヶ所でやるというところがございまして、どうしても会場の数に応じて機材の数や派遣する人数をその分用意しなければ

いけないというところがございます。

さきほど説明させていただき、元々コロナ禍の中で始まった事業ということもあって、コロナ禍では有効な手法ではあったかなというように思うんですが、コロナ禍も明けて、1ヶ所で集まって、という形式でできるようになってますので、そういった方式に変えれば、こういったコストも、集約できるんじゃないかと感じているところでございます。

○大沼会長 ありがとうございます。コストという観点でいうと、おそらく機材とセットで児童会館に派遣するテクニカルスタッフという部分も人件費がかさむし、もちろんそれ以外にもっと、ということと思いますが、先名委員よろしいでしょうか。

○先名委員 はい。これはPTAでも、よくオンライン形式で、いろんな研修だとかを各家庭の方もご参加の上、もしくは学校単位の事務局単位で参加していただいてやるんですけども、コロナ禍のあと、それらの機材や環境は結構整ってる状態で、操作ができる方もだいぶ増えていきますので、例えば児童会館のスタッフでそういうことが全くできない状況なのか、もしくはそういう業者の方を入れなければ必ずできない状態なのか、というところを教えていただければと思います。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 私も現場に行ったりするのですが、実際に児童会館の方で、そのあたりのスキルを持ってる方もおり、これはこうした方がいいんじゃないか、というようなことを言われたりもしますし、ある程度対応できるんじゃないかと思うんですが、それも場所によってまちまちなのではないかと、というところと、その辺の状況が我々では確認できないというところで、課題がございます。

○先名委員 ありがとうございます。予算自体はあんまり出てない状況でしょうか。もし5ヶ所でやろうと思ったら、概算でこのぐらいの費用は必要かなという。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 内訳といいますか、何にいくらというところまで、今は情報を持ってませんが、一応全部で100万ちょっと、それぐらいの費用がかかっている状態です。

○大沼会長 ありがとうございます。費用面だけじゃなく、やはり実際の効果というものもあると思います。どういうやり方をしたら、例えば低学年の子に、ファシリテーターが上手だったとしても、やっぱり意見を言うというのはちょっと難しかったり、逆にそれだと高学年や中学生が物足りないとかっていうことになるかも知れないですが、いろんな工夫をしないと、やはり低学年から高学年、中学生になるとかなりレベルの分散が大きいので、それを同じように議論しましょうということ

も、かなり難しいところもありますし、この辺り松田先生いかがでしょうか。

○松田委員 今の件にお答えをすると、なかなか難しいなと思うのですが、そういうところに関わるかどうか分かりませんが、一番下の人材育成のところに関して言うと、普段何となくこの人材の研修だとか育成のプロセスは知ってるんですけども、この事業で、ここで実際にユースの方々がファシリテーションをした後、それをどう継承していくのかっていうところが見えなくて、何か毎年やってそれで終わりにになると全然これ継承されてない、育成になってないという感じがするんですよ。

なので今年やった子が来年以降もそこに关われるようなたてつけがあるといいなとずっと思っていたんですが、その辺いかがですか。全員がやらなきゃならないわけではなくて、そういう見通しを持ったプログラム設計というのはどうなのかなと思ってきましたが、いかがでしょうか。

○大沼会長 ありがとうございます。事務局の方、もし今のご質問についてユースの方の継承がどうなってるかおわかりな範囲でお答えいただければと思います。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 今、松田委員がおっしゃったことはまさに、我々が課題に思っていることでもございまして、3回の養成講座のあと、1回ないしは2回の本番ワークショップ、というようにやっているんですけど、もちろん毎年このワークショップにリピートして参加してくれてる方もいる一方で、皆さん学年が上がって、どんどん卒業していくという状況もありまして、そういう人たちに、ワークショップを離れたあと、どういう活躍をしてもらうかというところは、まさに我々の方でも悩みどころな部分であります。具体的にどうするかというところまではまだアイデアはないんですが、今お話あったところは、我々も課題として感じているところでございます。ありがとうございます。

○大沼会長 ありがとうございます。ユースは多分、主に高校生・大学生だと思うのですが、せっかくファシリテーションの養成講座を受けても、本番1回のみでおしまいだと次に繋がらないっていうのは非常に大事なご指摘かと思えます。

これはこれでもう少し別のチャンネルで、何か違うことが必要なのかなと、聞いていて思いました。松田委員いかがでしょうか。

○松田委員 研修の段階から前年度以前の学生や生徒さんが関わっていく、その研修に関わるってところが多分継承なのだろうなと思っているんですね。

実際に研修をするファシリテーターだけではなくて、そういった経験者にサブファシリティもしくはテーブルファシリティについてもらわないと、なかなかうまく育たない。だから1回自分が教わって終わりではなく、それをこちらで繋げていくというところを意識向けたプログラムがあるといいなと思えます。

○大沼会長 ありがとうございます。ファシリテーション、ファシリテーター養成は、かなりの時間とエネルギーと別途のプログラムが必要です。

北大でもコミュニケーション養成講座をやっておりますし、そういったファシリテーターの養成をしていただいているNPO、市民団体等もありますが、それぞれかなり大きな話なので、環境教育の枠だけでやるというのは小さすぎかなという懸念は確かにあるかなと思っております。オンラインの坂本委員、いかがですか。

○坂本委員 パソコンの音声割れてしまっているの、皆さんの議論は全部は理解できなかったの、すいません。

今、オンライン形式の導入で費用対効果の点から最適とは言えないところからお話が始まったと思います。費用がかかるっていうのはわかりませんが、効果の方は検証されてるのかなと思いました。

私の意見としては、学校現場や学習にオンラインの手法が導入されるというのは、時代の流れから言って避けられないというか最適なのもかもしれないけれど、環境教育というジャンルにおいては危険も大きいなと思っております。

私達のところなどでは、特に山とか畑とかリアルな自然がたくさんあるですが、子どもたちが植物とか動物とかを観察するとき、本物が目の前にあるのに、すぐにスマホで名前を探したりとか、調べものを始めるっていうことが少なくありません。

目の前にあるものに注意を向けずに、データを探すというのが、もし小さい頃から身につく、身につけてるんだとしたら、環境教育の基本からは離れていくんじゃないかなと、自分の感覚をもっと大切にしてほしいな、と不安を持っているところでした。

なので私は、費用のこともそうですけれど、効果という点からも、慎重に検証しないといけないというように思っています。

○大沼会長 貴重なご意見ありがとうございます。まさにおっしゃるとおりで、オンラインも時代の流れとはいえ、まず調べる前に自分で感じる、触るとするのが大事で、多分、この後の(3)、(4)で出てくるところとも関係してくるかと思うので、またそのときにご意見いただければと思います。

こども環境コンテストでは、まさにそういう話がたくさんあるかなと思います。中村委員いかがでしょうか。

○中村委員 今の坂本委員のお話にも関連してくるかと思うのですが、「さっぽろこども環境コンテスト2025」を観覧してまいりました。フードロスや自然林再生、腐葉土作り、動植物保護といった環境のために取り組んでいる様々な活動を小中学生の皆さんから発表していただきました。低学年が食べきれない給食を高学年の教室に持っていったり、川で釣った魚をその場でさばいて調理して食べ、いのちにつ

いて考えたり、教室の夏場の暑さを植物の力で乗り越えようと実験を試みたりというような形で、AIの時代だからこそ、五感を通して、試行錯誤しながら体験していくことの大切さを感じました。

特に胸を打たれたのが「自分たちができることはたくさんある」という子どもたちから発せられた言葉です。主体的に関わる姿勢にたいへん感銘を受けました。

○大沼会長 ありがとうございます。体験が大事だということですね。こども環境コンテストのところにご意見をいただいたということかと思えます。

事務局からの資料に戻ると、ゲーム形式はどうか、という話もご提案いただいておりますが、このあたり、高橋委員いかがですか。

○高橋委員 ありがとうございます。北海道環境財団の高橋と申します。ゲーム形式ということで、我々当財団もですね、年に数回、児童会館とか放課後こどもクラブで、こういった1時間のプログラムを実施させていただいております。

やはり、学童という場所では、集中力を考えると1時間が限度かなというところで、できるだけゲーム形式を複数入れて飽きないようにということと、あとこの対象年齢に対する課題というところも記載されてますが、年代というやはり低学年が中心であと何人か中高学年がいらっしゃるっていうパターンが非常に多いんですけども、ベースは低学年にもわかるように進めつつも、それだとやはり中高学年が飽きてしまうというところもありますので、そこは同じプログラムをやっていたくんですが、プラスアルファで、高学年にはちょっと宿題を出すような形で実施はしております。そうすることで、満足度は高められるかなという気はしております。

○大沼会長 そうですね、1時間で集中してできることということで、有効なツールであろうことだと思います。

個人的にはゲームは私自身かなり首を突っ込んでおりまして、本当に環境教育のゲーム、優れたものがすごくたくさん出てきておりますし、来月2月に京都で、いろんな市民やNPOや教育関係者が集まるイベントでもやはりゲーム展示とか、かなりたくさんあって、多分そういうところも参考になると思います。

それこそ高学年と低学年で差があるからこそゲーム、ゲームだとハンディがつけられる、ゲームだと高学年が低学年を支えながらできるとか、いろいろ工夫の仕方がたくさんあると思っており、考える余地、可能性としてはかなりあると思います。

他の事業にもご意見いただきたいと思えます。

環境副教材ですが、デジタル化は既に走っていて、これからブックレットということで、こちら学校の先生の方でご存知いただいている方、あるいは学校の側で今こういう状況だとか、負荷が改善されたとか、あんまり変わってないとか、そのあたりの感触をいただければと思うんですけども、いかがでしょうか。

三浦委員、よろしいですか。

○三浦委員 幌東小学校の三浦です。環境副教材がデジタルブック化されるということで、すごく子どもたちにとっては、調べ学習は活動を進めやすくなるんじゃないかなという期待はしています。さらにそこに動画によるコンテンツとかもいろいろ盛り込まれていくということも考えると、やはり総合的な学習の時間の中で、利用しやすいものになっていくということが期待されていくんですが、反面、このブックマークをずっとできるかどうかというところなんです。

子どもたち一人一人のChromebook端末を開くと、右上のアイコンから、市の教育委員会があらかじめ設定しているブックマークがあるのと、それぞれ個人がブックマークするものというようにわかれているんですが、それがデフォルトでこの副教材にアクセスできるような、すぐに行けるように設定されるのであれば、どの先生もいけるかなと思います。

しかし、この冊子があることで、先生方にも「あるからね」と言える部分はあったのですが、それが完全になくなってデジタル化となったときに、存在をどうやって意識づけていくかというところが新たな課題として出てくるんじゃないかなと思います。

やはり、どのように使っていくか、各学校によって、雪・環境・読書の環境について、どの学年の総合的な学習の時間のカリキュラムに位置づけているかということもあります。長年やっている、大体学校の中で年間のカリキュラムはある程度固定化されていくと思うんですね。それで、そこにどのようにカリキュラム見直しをかけて、環境というところをどれだけ広げていくかというのも可能性でもあり、課題でもあり、ということじゃないかなというように思っています。

○大沼会長 ありがとうございます。入口のところ、そもそものところで、「あるよ」というのが、目に見える化されている、そういったフレームもあるし、これは多分、冊子だろうがオンラインだろうがカリキュラム全体というものはどうしてもある程度ルーティン化し、その入り込みというか変更が難しいということですね。

能登委員、お願いします。

○能登委員 幌北小学校の能登です。子どもたちの様子を見てみると、やはり調べるといえることになると、タブレットで調べる、というのは、もうほぼほぼ定着しているところなんです。

なので今までのように冊子から調べていくというよりも、タブレットを開いて調べていくという方が、自ら活用していく、という部分では、これからいいのかなというように感じています。

ただ、先ほど三浦委員がおっしゃったように、すぐにそこに行ける設定というところが必要かなというようには思いました。

これまでの冊子では、使い忘れだったり、4月に配られてそのまま埋もれてしまったりというような課題があったので、そういった部分はなくなっていくけれども、すぐに子どもたちが入れるような設定というところが、これが必要なと思いました。

○大沼会長 ありがとうございます。すぐに子どもが入る。そうですね、入った後は確かに今時の子どもはサクサク検索しますよね。

野田委員、お願いいたします。

○野田委員 北都中学校の野田でございます、よろしく申し上げます。

環境副教材は基本的に小学校の教材ですので、中学校では使われていないと思うのですが、関連して話をすると、中学校の環境学習といいますと、環境に関わる理科の学習等でございますけど、タブレットを使って、それぞれが学んでいくということもあるかなと思うのですが、やはり先ほど坂本委員がおっしゃってたことは非常に大事だなと思っています。目の前に事象があるのに、事象に目を向けずデータだけで学ぶということが、やはりおかしいということなんですね。

中学校も小学校もそうだと思うのですが、やはり自分の実感を伴ったものにするには実物をできるだけ見せなくてはならなくて、リアルで物を捉えてから次はなんだろう、ということが大事だと思います。調べることありきではなく、必要だから調べるということにして、必要だからそれを学ぶ、必要だから次の行動するんだ、という行動化のことも含めて大切だと思うので、小学校におけるこの環境副教材についても、副教材の中身だけではなく、扱い方を含めて、またこれから検証が必要だというように感じてました。

○大沼会長 ありがとうございます。冊子かどうかということと、デジタルとリアルの接続というところがこれからますます大事ということかと思えます。

斉藤委員、お願いします。

○斉藤委員 資生館小学校の斉藤です。立ち上げた札幌市小中学校環境教育研究会の一員として、私も今年度から改訂作業に携わらせていただいております。

今まで冊子でしたので、能登校長先生がおっしゃっていたように、1年生の時に配ったものを2年生の最後までとっておかなければいけないのですね。それがどこに置いたか忘れたり、教室の本棚にそのまま眠っていたり、また今は転出入も非常に多いので、転校していく子どもはそれを持っていくのですが、入ってきた方はもっていないわけです。それを各学校で、環境局に申請して新しい冊子を送ってもらっているか、というと、多分そんなにそういう動きはないのではないかと思います。

そうになると、持っている子と持っていない子がいたりとか、また、今は、学びの多様化が非常に言われてますので、例えば3、4年生の子が6年生の内容に進んで調

べてみたい、もっと知りたい、となったときに、3、4年生用の冊子しかないの  
で、5、6年生用の内容は見れないわけです。

でも、これをデジタル化して一本化することで、最初に谷内係長からご説明あつたように、学年別から内容分野別に編成していますので、水のこととか下水のこととかごみのこととか、また家庭科とか道徳の内容も盛り込んでいますので、そういったところを調べたいとか、テストが早く終わって少し時間があつたときにタブレットを開いて、読み物として活用するとか、朝読書の時間もありますけれども、そういったちょっとした時間ですぐにいつでもどこでも触れられるような身近なものにしたいなということで、改訂作業を進めています。

三浦先生がおっしゃっていたように、できればChromebookのブックマークもデフォルトに設定してもらいたいと思っております。そうすると全員の端末でブックマークから環境副教材にワンクリックですぐ行けるようになりますので、そこを強く要望したいと思っております。

○大沼会長 ありがとうございます。札幌市小中学校環境教育研究会については、後ほどお話いただきたいと思っております。学年などに関係なく、興味を持った分野にどんどんと繋がっていき、というメリットもあると思っております。

一番トップのブックマーク、確認場所となると、このあたりは環境局か教育委員会から、何か現状のご説明はありますか。

○教育委員会（村井係長） ありがとうございます。ブックマークのところについては、谷内係長とも確認し、この後、環境局と教育委員会で、ICTの担当と打ち合わせをしようということで、まだどうなるかというところまでは話が出ていないんですけども、そこに向けて打ち合わせの機会を設けて進めていく予定でございます。

あくまで副教材っていうところで、学校としてはやはり事物事象があつて、生活総合とか理科とかでも、ものがあるのに、本に行つて文字に行つてしまうと、それこそ本末転倒になってしまうと思っておりますので、先ほど委員の皆様がおっしゃつたとおりに、環境教育の体験だったり、先生方の研修でも「行つたら違つた」、「生（なま）を子どもたちに見せてあげたいな」、という思いが前提として、その後にそれを更にプラスアルファになるような活用の仕方を、学校とともに今後作つていけたらと思っております。

ICTのブックマーク等については、また環境局とともに打ち合わせを進めていきながらどういう形にできるかということをご検討いただければと思っております。

○大沼会長 ご検討はいただけそうだとということで、ぜひお願いします。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 環境副教材のデジタルブック化のメリットだとか、課題点だとか、今まさに先生方がおっしゃつたとおりで、我々もで

きるだけ多くの方々にそれぞれのニーズに合わせて使ってもらえれば、というように思っております。

あと補足としまして、今まで小学校にのみ配っていたのですが、これを単元別化することによって、場合によっては中学生にも送付できるようになるのではないかなというように考えています。

実際に他の市町村では小中学校向けとして作っているケースもありますので、単元別化することによって、もしかしたら中学校の方にも提供できるようになるかもしれないなという期待をしているところでございます。

○大沼会長 ありがとうございます。内容は今は小学校向けですが、今おっしゃっていただいているのも今後可能性としてご検討されると…。

○先名委員 すいません、時間のない中、横にそれるかもしれませんが、次期学習指導要領で、中学生も今は高校の科目である情報1、2だとか、中学校でも情報と技術だとか、小学校も情報の科目が入ってくるという話を伺っていたもので、その辺の絡みも含めてこういうコンテンツができると使えるようになってくる可能性はあるでしょうか。

○大沼会長 ご質問について、教育委員会からお願いします。

○教育委員会（村井係長） ありがとうございます。現在各教科でワーキンググループということで、まだ決定事項ではないので、現段階でこうしますということは言い切れないところがあるのですが、実は方向性としては例えば小学校では総合的な学習の時間の中にちょっと情報分野を入れるような形が、話として動いてはいます。

まだ確定というところまでは言い切れないところがあるのですが、それが来年度の途中ぐらいには見えてくるかなと思います。そこが見えてから動く方が、おそらく札幌市としてもスムーズに進むのかなというように思っています。

○大沼会長 大きな方向としては議論を進めているが、あまり細部について確定的なところはないと…。

○野田委員 教育委員会の指導主事の先生がおっしゃっておりますので、私からは話す場面ではないですけど、要するに、まだ国も論点整理を示しただけなので、具体まで示されていないので、これから文科省に答申されて、出てきてからになるのかな、というように思っておりました。

○大沼会長 そういった動きも睨みながら、また札幌市としても、先生方がいろいろ機動的に動けるスタンバイはきちんとしておく、ということかと思えます。

松田委員、お願いします。

○松田委員 はい、ありがとうございます。この指導書、教員が使う方の分には、探究課題の事例とかは載っているのでしょうか。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 一応、教師用手引書には、こういうように教えるといいですよとか、具体的に何ページからがこの教科書の何ページに関連しますよという形では載っています。

○松田委員 なるほど。「この教科のここで、このようにやるといいですよ」、ということは載っているということですね。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） そうですね。我々も、教科書が変わるたびに新しくその教科書を購入して、この単元のこのページと関連してますよということは、記載するようにはしております。

○松田委員 わかりました。一方、探究課題ですね。課題の設定が多分大事だと思うんです。児童生徒が課題を設定する際に、ヒントとなるようなものがそこに載っているのかなと思ったのですがどうでしょうか。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 子どもたちの探究ということですね…。

○松田委員 子どもたちが何か探究活動する際に指導するのか教員だとするならば、教員が「こういったことを探究課題とするといいんだ」というようなことが起きるのかなと思ったのですが、載っていないのであれば、それはそれで…

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 指導のポイント、ということを書いてはありまして、こういうように教えたらいいよ、ということが書いてあるのですが、それが松田委員がおっしゃるものにあたるのかどうかということにはわかりませんが、ポイントということは載せてはおります。

この教師用手引書についても、今後、デジタルブック化に伴って同じように変えていく必要があるのかなとは考えているのですが、環境副教材がデジタル化された後に、まず実際にその学校現場で使っていただいて、こういうように使うといいよ、というような事例集を積み上げられればいいなと思っております、そういったものを通じて、松田委員がおっしゃったような内容により近づくことができるのではないかと考えているところでございます。

○松田委員 ありがとうございます。探究課題そのものを載せてしまうと、それ

に沿ってやってしまうようになると思うので、何かそのヒントだったりだとか、もしくは視点の入口のようなものが載っているといいな、というところなので、あえて載せて欲しくないなと思っていました。それを載せてしまうと、そのままその通りやってしまうというように思いました。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） ありがとうございます。参考にさせていただきます。

○大沼会長 あえて載せないで欲しいという、学校の先生側も含めて創意工夫が求められるという、かなり大事なことだと思います。確かにおっしゃるとおりと思いつつ、学校の先生も大変だなとも思います。

時間が押してきてまいりました。もし、ご意見があれば校外学習バスの件、それ以外のことも含めましてございましたらお願いします。

酒井委員をお願いします。

○酒井委員 北海道ガスで広報を担当しております、酒井でございます。それ以外のところになります。環境教育へのクリック募金と、エコライフレポートについて、1点お話をさせていただきたいと思います。意見になります。

環境教育へのクリック募金については、弊社も参加させていただいておりました、8ページでございますとおり、前年を上回る93校の応募で、抽選によって決まっているというところだと、落選している学校もあるんだなというところで理解いたしました。

7ページに協力企業一覧がありますけれども、この事業は札幌市の財政を痛めることなく、企業の方で寄付というような形ですので、増やせば、この落選した学校にも寄贈できるのかなというように思っております。

例えば、後ほど出てくるかと思うのですが、環境広場に出展しているような企業にこういった事業はいかがですかと呼びかけたり、アドバコム様でエコチルを発行されておりますので、エコチルで投稿している企業様にこういった事業はどうですかと働きかけると、また増えてくるのかなというように思いました。

次に9ページのエコライフレポートです。こちら私の子どもが小6小4で、いつもやってはいるんですけども、北海道ガスの広報という観点でいくと、ちょっとこの色だと、子どもがわくわくしづらいのかなと思っております。

我々も制作物、子どもがこういったものを喜ぶかということで、結構頭をひねりながら作るのですが、ピンクや紫、水色だったり、環境イメージしやすいグリーンだったりという色は割と使うのですが、そういったところで工夫をすると子どもが「あ！なんだこれ、楽しそう！」というように見るようになると、またちょっと興味も違ってくるのかなというように思ひまして、広報の観点で意見を申し上げさせていただきました。

中学校用も、例年の形式から少し中学生向けにしっかりと書かれていて、これは

理解が進むのでとても良い内容かなと思いますけれども、文字量をどれだけ減らすか、それによって結構読んでくれるところが変わってくるかと思います。なかなか文字を減らすということは、伝えたいことが多いですし難しいかと思うのですが、今後そういった観点でもご検討いただければ、より良いものが作れるかなということで、3点とも意見になりますけれども申し上げさせていただきました。

また恐縮ですが、予定がありまして、本日はこれで失礼させていただきます。前回は初参加、今回初めて意見を申し上げたということで今年度は終わりという形になりました。皆様からいろいろな意見を聞き、弊社の教育活動や次世代教育にいろいろ活かせるかなと思っております。

校外学習バスですとか環境広場への出展ですとか出前授業等いろいろとさせていただいておりますけれども、これからも北海道札幌の子どもたちのために、取り組んでいきたいと思っておりますので、お力添えいただければと思います。

○大沼会長 お時間のない中、貴重なご提案、ありがとうございます。

では、クリック募金につきまして、スポンサーを増やせないか、声かけできないかとか、単価を上げて年間24万円の枠をもうちょっと増やせないかなど、事務局の方、いかがでしょうか。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長）

御寄附いただける企業様を増やしたいという気持ちはございます。その中で、例えば、今の金額だと、新規参入するにも入っていきづらい企業様も多いのではないかと、とか、もっと金額を少なくして多くの企業様に入ってもらうようにした方がいいのではないかと、など考えているところでございます。

クリック募金も始まってからちょうど20年ほど経っておりますので、いろんな面で見直しも必要ではないかなというように思っております。その中で、企業様への声かけですとか、そういったものがもしかしたら出てくるのではないかなというところでして、引き続き検討させていただきたいと思っております。

○大沼会長 ありがとうございます。引き続きエコライフレポートですが、文字数を減らすですとか、デザインのこととかどうですか。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） こちらはいただいた意見に基づいて、今後もより良いものを作りたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○大沼会長 ありがとうございます。欠委員、お願いいたします。

○欠委員 市民委員の欠です。先ほどエコライフレポートの話がありました。ご説明にもありましたが、自由記述欄のところ、ぜひ増やしてほしいということで申し

上げておりましたが、このとおり記載していただきまして、本当にありがとうございました。

ここに貴重な意見がいろいろ出ていると思いますので、以前にも述べましたが、できるだけ先生方、あるいはその他の関係の方々、多くの方々にこれを知らせられるような、こういう意見があるんだよというような部分を見せられるような、何か機会があればいいのかなと思っております。そのあたりを考えていただければいいなと思いました。

それからもう一点、バスの話ですが、やはり事業の意義、環境教育の視点ということが大事です。そのためのものとしてお金をかけていますので、やはりこの環境教育の視点ということをまず最初に重点的にとといいますか、強調して出した方がいいと思いますし、あるいは報告書においても、必ずこの視点を中心にまとめていただきたいということで、そのあたり、環境教育として生かされるその効果ということを強調して取り組んでいくことが大事だと思います。

○大沼会長 ありがとうございます。事務局の方、今の2点につきまして、このエコライフレポートの自由記述、せっかくこれだけ書いていただけたのでそれをもっと広めることと、バスについて、環境という視点をもっと強調していくことについて、いかがでしょうか。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） エコライフレポートにつきましては、今も、自由記述欄の記載を、学校にお配りしている認定書にて、「ほかにもこういう取組をしてくれました」という形で載せていて、各学校に送ってポスターみたいに貼っていただいております。それ以外の方法、例えばホームページで周知するとか、いろんな方法がもしかしたら取れるかもしれませんので、そのあたりは我々も検討してみたいと思います。

もう1点のバスの件につきましても、毎年为学校への周知については我々も頭を悩ませているところで、校外学習のために使うんだよとか、環境教育の効果についてきちんと書いてねということですか、先ほどの行先を確認しないで後で変更というお話と繋がるんですが、それも含めて、学校にはいろいろと周知しているつもりではあります。

それでもやはり、徹底されてないとか、よく読んでもらえないとか、そういったことがちょっと多くなってきていて、いかに皆さんに読んでもらって、意義を知ってもらったりだとか、きちんと適正な申し込みをしてもらったりとか、そういうことをいかにやるかというのは課題になっております。今後も方法を考えていきたいなというように思っております。

○大沼会長 ありがとうございました。時間がだいぶ押してきておりますので、（3）と（4）を説明していただいて、また議論に戻ってきたいと思います。事務局から、こちらの説明をお願いいたします。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） では続きまして、（３）環境教育環境学習の場と機会の充実と、（４）普及啓発のための情報の発信・広報と行動の後押しについて、一括で説明させていただきます。

まず最初、アとイは環境プラザから説明をお願いします。

○環境プラザ（上杉係長） 26ページの「ア 学習支援等」についてご説明させていただきます。概要としまして、主に施設見学と教材の貸し出しでございます。

昨年度末に見学ツアーのパンフレットを更新いたしまして、令和7年度分の見学受け入れの増加を狙った広報を実施したところ、今年度につきましては、小中学校の受け入れが増えてきたのと、特別支援学級の受け入れも増えているという状況となっております。

内容としては、特にSDGsをテーマとした探究学習のニーズも増加していたりするような状況でして、学校団体を中心に利用が拡大してきています。今後も、増加する利用者に対しまして、展示内容の充実ですとか、学習プログラムの質的向上を図りながら、効率的に受け入れ体制の整備を推進していきたいなというように考えております。

今年度の受け入れ数については表のとおりです。

続いて「イ 各種講座等の実施」になります。

今年度の実施状況としましては、昨年度に引き続き、一般社団法人楽子森と連携した木育のワークショップを開催した他、毎年実施してるのですが、青少年科学館の天文指導員の方をお呼びしまして光害の話ですとか、あとは今年宇宙ごみの話とかも交えて、星空に興味を持ってもらいながら夜空における環境問題について考えるきっかけを提供してまいりました。

あと、今年初めてなんですけれども、円山動物園といろいろと共催する事業の中で、海鳥センターとの繋がりができ、そちらの職員による海鳥のひなの飼育をする体験アクティビティを環境プラザで実施しました。

写真の添付がなく申し訳ないのですが、初めての取組ではあったのですが、海鳥というものの生態について、あまり身近にいないものですから、小学生親子を中心に参加してもらったんですけれども、海鳥というものがどんなものかわかった、ということとあわせて、プラスチックごみというものが海だけの問題ではなく陸の問題でもあるんだということについても理解してもらうきっかけになりました。

こちらは市民団体との連携した事業になりますが、Heal北海道という市民団体と連携しまして、フードマイレージに関連した調理体験プログラムを開催いたしました。

基本的には調理体験の方でご参加いただくような流れとしていたのですが、その調理体験の後には、その食べ物がどこから来ていて、どれだけの環境コストがかかっているのかということを経験形式で学ぶような機会を提供しました。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長）　続きまして、「ウ　さっぽろこども環境コンテスト」です。28ページの概要に記載のとおり、小中学生が日頃、環境のために取り組んでいる活動を発表するコンテンツとして平成20年度から実施しており、今回で18回目の開催でした。

29ページから31ページにかけて、各出場団体の発表内容について簡単ですがご紹介させていただいております。また32ページにあるとおり、審査委員として大沼会長と坂本委員にご参加いただきましたとともに、中村委員と先名委員には来賓としてご観覧をいただきました。皆様、どうもありがとうございました。

コンテストの結果は次の33ページのとおりで、最優秀賞を受賞した3団体につきましては、明後日22日に行われる市長報告会において、秋元市長の前で発表していただくことになっております。

続きまして、34ページの「エ　サステナKIDS AWARD」です。これは、前回の会議でも説明いたしましたが、渋谷を拠点に活動する一般社団法人SWITCHとの共催により、開催しております。企業や団体が環境取組を行う上での悩み事をミッションとして子どもたちに提示し、子どもたちはミッションの解決策を、まんがやポスターの形で応募して、優秀な作品を表彰するというものです。

今年度は2回目の開催であり、今年度の概要は35ページに掲載しています。前回は応募対象が札幌市の小、中、高校生だったところを、さっぽろ連携中枢都市圏といいまして、札幌およびその近郊の市町村の小学生を対象ということに変更して、前回とほぼ同じような形で行っております。

全部で17の企業や団体がミッションに参加しておりまして、環境政策課や教育委員会からもミッションを提供しています。優秀作品については、それぞれの企業や団体などで賞品を差し上げております。

ちなみに教育委員会の賞品としては、今年度の夏休みと同様、エコライフレポート裏側に、子どもたちが考えた環境の取組やイラストを掲載する予定です。

応募期間は2月8日までですが、1月初め時点で840件を超える応募があったと聞いております。第1回目の応募総数が658でしたので、大幅な件数増が期待できる場所です。優秀作品の表彰式は3月14日に、ここエルプラザのホールで実施いたします。

次、（4）に進みます。最初のアとイについては環境プラザから説明します。

○環境プラザ（上杉係長）　では36ページの「ア　環境プラザの情報発信」についてご説明させていただきます。概要としましては講師派遣制度ですとか教材貸し出し事業などについて、ホームページで情報提供しているものです。加えて、フェイスブック、InstagramといったSNSでも情報発信をしています。

今年度のアクセス数としまして、12月末現在で74,315ということで、毎月8,000件程度のアクセスがありますので、今年度も昨年と同等の数値となると考えられています。

SNSにつきましては、効果的な発信とするために、よく見てもらえる時間帯とし

て、出来上がったらずぐに上げるのではなく、ある程度時間帯を設定して予約方法というものを使って定期的な配信に留意しております。その他にも今後プラザ内の展示や事業の広報ツールとして、動画コンテンツを活用しながら発信していこうというように考えております。

なお、閲覧数については、これまで300人程度のことが多かったのですが、今年度下半期に投稿時間帯を夜間に変更してからは、500～600人というように数字が伸びてきているような状況です。また、Instagramだけの情報ですが、フォロワー数が1月8日現在で419人、属性としては女性が多く、年齢は35歳から44歳が最も多いということで、じゃらんというお子様がいるご家庭向けの情報誌にも掲載があるとおり、子育て世代の方に多く見ていただけているのかなという実感がございます。

続いて37ページ、「イ 環境中間支援会議・北海道の取組」です。

こちらにつきましては、主に環境☆ナビ北海道というホームページの運営が基本的な業務となっております。こちらの方は本日委員としてもご参加いただいております北海道環境財団とEP0北海道と3者で共同して実施しているような内容になります。

これも含めてこれまで事業実施の方があまりなかったのですが、これからどんなことができるだろうかということで、改めて会議の中でお話をしている状況となっております。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） では引き続き「ウ 環境広場さっぽろ」について説明いたします。今年度は令和7年7月26日と27日の日程で、大和ハウス プレミストドームで開催しました。期間中の来場者は18,455人で、188の企業や団体に出展いただきました。資料にこれまでの表がありますので、あわせてご覧ください。来年度も、夏休み時期の開催を想定して準備を進めているところでございます。

次に「エ 環境教育・環境学習ガイド」の発行です。40ページで記載しておりますのと、お手元に現物資料をお配りしておりますので、そちらを合わせてご覧ください。こちらは、各部局で行っている環境教育の取組を取りまとめて市民に情報提供して、各取組への参加をしてもらうことで環境教育・環境学習をより一層推進を図るというものです。

開いていただいて、1ページ目につきましては、以前の会議の中で、左下に書いてある低炭素という文言につきましては、ご意見を踏まえまして、2018年の第2次札幌市環境基本計画に基づいたものであるということを記載しています。

資料の41ページには、これまで説明させていただいた、その基本方針の四つの取組に対して、それぞれの事業どれぐらいの事業が行われているかということを表にまとめておりますので、ご覧いただければと思っております。

最後に42ページになりますが、前回の会議でも議題としてあげさせていただいた、「オ 札幌市の子どもたちへの環境教育環境学習や啓発活動の推進に関する連携協定」について報告いたします。札幌市環境局と札幌市小中学校環境教育研究

会、株式会社アドバコムにより7月26日に連携協定を締結しました。協定の締結式は同日に行われた環境広場さっぽろのステージイベントとして行っております。

今年度のこれまでの連携状況ですが、まず冒頭でお話しました、環境副教材において先ほど齊藤先生からお話ありましたとおり、齊藤先生にも作成に加わっていただいている他、ワーキンググループに新たに3名の環境教育研究会、環教研の先生方に加わっていただきました。

また、アドバコムや環教研が行った各イベントに対して名義後援を行っております。

さらに、こども環境コンテストにおいて、エコチル特別賞を新設し、あとは審査員として、両社の関係者に加わっていただきました。

このほか、環教研の先生が企画したごみ減量プロジェクトとして、本市職員が出前講座講師として参加して、そこで出た子どもたちのアイデアを表彰して環境広場さっぽろのステージイベントやブースで紹介するといったことを行いました。

○大沼会長 ご説明ありがとうございました。個別の事業について報告ということですが、それぞれについて、あるいは連携等も含めて、ご意見いただければと思います。

松田委員、先ほどの最後の件、いかがでしょうか。

○松田委員 はい、先ほどの件に戻るのですが、バスの件、出前講座の件、それから環境保全アドバイザー・リーダー派遣の件の3件にからんで、になります。

まずバスの件、10月下旬から12月上旬でしか使えないというのは、明らかなのでしょうか。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） はい。毎年、バス会社や旅行代理店に状況を確認しております、大体同じような状況だということです。

○松田委員 ここはもう書かれてあるそのまま、このあたりでしか使えないと書いてあるんですね。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） そのとおりです。

○松田委員 それでは、これがいつ申請が締め切られて、いつその採用が決定する抽選であるかということ、プロセスを教えてください。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 募集自体は、年度が始まる前、2月から3月ぐらいに行って、3月末の時点ではもう採用学校が決まっている状態です。年度があけないと、予算の執行ができないということもありまして、4月になってから、その決まった学校の件数に基づき、入札を行ってバス会社を決定するというプ

ロセスになっております。

○松田委員 なるほど、ありがとうございました。教育課程の編成に関していうと、もうちょっと早くやれるといいのかなと思いますが、その予算上の関係があると思うので、なかなか難しいところで、学校側のご理解を得ながらやるしかないのかなと思いました。

2点目が出前講座の件ですが、出前講座が今年まだこれからもあるでしょうけれども、今年度は減っている状況だということで、このあたり、学校側として使いやすいたてつけになっているのかどうかというところが気になりました。

使いやすいものであれば使われると思いますし、減ってる、もしくはそれがなかなか使いづらいのであれば、使いやすいようにするというのが必要なのかなと思います。またこれに絡んで、アドバイザーとリーダー派遣のところとの兼ね合いで、これ重なってる部分があるのかどうかということです。

こちらの方で、小学校中学校での利用が多いと書いてありましたけれども、そちらと重なりがあって、出前講座の方が減ってるのかどうか、このあたりを伺いたいと思います。

○事務局（谷内環境教育・啓発担当係長） 出前講座ですが、ご指摘のとおり、件数も減少傾向にあるところでございます。人数も減ってはいるんですが、人数が減っている理由としましては、今までは、体育館などで、全学年が同じところに集まって聞く、というケースが多かったのですが、最近は、例えばSDGsの17項目があったら、個人がSDGsの17項目から好きなものを選んで、それぞれが興味がある講座を聞くという形でやってる学校も増えておまして、1件あたりの人数が減っているというところはあるのかなというように思っております。

出前講座のたてつけが学校にとって使いやすくなっているかどうかということですが、一応、受講いただいた学校からはアンケートをとらせていただいてまして、どの学校も満足度は高い状況で、今後SDGsを勉強する上での導入としての良かった、ですとか、そういった言葉をいただいているので、使いづらいということはないのではないかと考えてはいます。一方で、なぜ出前講座が減ってるかということで、出前講座は我々市だけではなく、いろんな企業や団体でもやっているということもありますので、そういった使い分けや選択肢が広がってる結果なのかなというように考えております。

リーダー・アドバイザーの件ですが、リーダー・アドバイザーと、出前講座は我々と環境プラザとで、それぞれ別々に募集をしています。

我々の出前講座は、広報課で、出前講座は札幌市でこれだけやってます、という形で、募集しております。そのメニューから、先生方で選んでいただいているんですが、一方でリーダー・アドバイザーについては、それとは別に環境プラザで募集しているということもありますのと、出前講座は座学になりますが、アドバイザー・リーダーは自然観察のようなものが中心になっておまして、それぞれフィールドが

違うというところで、それぞれの因果関係だとかはあまりわからないところです。

○松田委員 ありがとうございます。出前講座の件は、多様化しているということで、学校側にとってもいろんな選択肢の中から選んでいるので、札幌市の出前講座自体のニーズが減っているというのがよくわかりました。

満足度が高いということもとてもわかりますけれども、おそらく受けた方の満足ポイントだと思ひまして、まだ受けたことがない方々の要望や使いやすさといひますか、こうしたらもっと使いやすくなる、というようなところがあるといひなと思ひます。なかなか全体規模のアンケートは難しいでしょうけれども、何かそんな声が届いているともっと使いやすくなるのかなという、何となく思ひます。

あとリーダーと出前講座の重複の部分ですね、野外活動だけではなく、リーダーの説明に学習会や研修会と書いてありましたので、そのあたりの重なりがもしかしたらあるのかなと思ひてましたが、データがないということですので、わかりました。

○大沼会長 ありがとうございます。この会議のメンバー構成を見ても、中学校の先生が1人、高校の先生はいらっしゃらないということに、今気がつきました。

ちょうど今、松田委員がおっしゃっていた内容ですが、まさに中学高校で出前講座が少ない、もちろんこれは市からの出前講座として派遣した数であり、民間企業や団体等はカウントされてないといひえ、そのあたりの連携や相互連絡ですとか、あと現場の方はどういふ感触なのかということが気になります。

やはり意見交換の場、情報交換の場としてこの会議はもっと機能すべきだと気づいてしまったのですが、中学の先生も1人しかいらっしゃらないところ、野田委員、中学校の現場の方で出前講座あるいは先ほどのアドバイザー・リーダー派遣含めて、中学校の現場として何かあれば願ひします。

○野田委員 中学校で扱うとすると、理科の授業か、総合的な学習の時間ということになるでしょうけれども、先ほどの話にもあつたとおり、なかなかやはり、学校のカリキュラムが固まっていくと、それに寄っていくんです。そこに新たなものが入るためには、それなりの、インパクトといひか、宣伝といひようなものがないと入る余地がないのです。

しかし、入る余地があつて実際にやつたところでは、「よかつた」と言ひますが、それが広がっていくかといひると、広がっていく機会がないので取り入れづらいのだろうなと…。

結局、やらなくても学校教育が成り立ってしまうので、あえてやるためには、あえてやるための何か仕掛けが必要になってくるし、何とかやつてるところはおそらく継続して同じところをやつたりするといひことが起きてしまうのかなと思ひます。

○大沼会長 ありがとうございます。三浦委員、願ひします。

○三浦委員 野田先生もおっしゃったこと、小学校の総合的な学習なのですが、総合的な学習の時間のカリキュラムの中で位置づいているものっていうのが結構これが大きくて、私の前任校では、校舎の裏に月寒川が流れていて、3年生の総合的な学習の時間の年間カリキュラムに川の学習パネル展に参加するというものが位置づいていたんですよね。

それに環境教育リーダー派遣をしてもらって、それで実際に裏の月寒川に住んでいる水生生物などを見せてもらって学ぶ、ということが位置づいてるので、前任校は毎年川の学習パネル展に参加して、環境教育リーダー派遣をもらって、というようにやっているんですよね。

ですから、学校のカリキュラムがその立地条件に対してどのように組まれているか、そこで何が使えるか、というところを考慮して使ってるものであって、新たに、というところになると、自分の学校の使える環境はなんだろうか、そこに使える環境教育リーダー派遣だとか、そういうものがないだろうかというのを探していくことになる。

なかなかそれを、今まで築いてきて固まっているものを上回るぐらいのメリット、デメリットを比べたときに、なかなか新たに、というのは…。私自身は、こういう場に参加させていただいて、いろんなお話を聞く機会があって、見直すというか、チャレンジしてみようという気持ちも出てくる場所ですが、やはりそうではない先生方は、元々固まったカリキュラムがあるのであれば、新たにいうところに気持ちが向きづらいという側面は否めないのではないかなというように感じながら聞いていました。

○大沼会長 ありがとうございます。欠委員お願いいたします。

○欠委員 元々、私は中学校の社会科を担当していました。今、野田委員からありましたとおり、いろんな中学校で、大体総合とかも固まっているのですが、ただ、環境というテーマは、これからにとってすごく大事なことなんです。

小学校はもちろんですし、中学校でも、それこそこのテーマに関わる方がお一人ずついらっちゃって、そして何人かの先生に広げていただいたとしても、まだまだだと思います。

世界的に地球規模で大事な問題になっているので、絶対取り上げないといけないんじゃないか、ということぜひ、校長会でも広げていただくということをお願いしたいです。

環境関係のいろんなところでぜひ言っていただいて、もちろん小学校もすごい大事で、その基礎を養ってほしいし、そして中学校でも広げていく方向で、総合あるいは理科、社会などで時間が取れるかどうかわからないんですが、環境ということに触れることはいろいろな教科でできると思います。ただ、総合としてきちんとカリキュラムの中に入れていくことが必要になってきているのではないかな、と感じ

ています。

○大沼会長 ありがとうございます。能登委員、お願いいたします。

○能登委員 今、総合的な学習の時間の話になりましたが、本校も去年、5年生で地産地消の大切さということで学習していったのですけれども、そのときに子どもたちが身近なところで何度も繰り返し関わる、ということが必要になってくるので、そういった場合の講師の方として、昨年ですと本校の近くにあるコープさっぽろの方や、セイコーマートの方、こういった方々にアプローチをして、そういった方々のお話を何とか聞く、というようなことになっていきやすいかなと思います。

なので、子どもたちからすると、やはり身近なところにいる方々に話を聞く、というようなところが多くなってくるので、どうしてもなかなか、こういうところにお話を持っていきにくいという部分もあるのかなというように思います。

○大沼会長 ありがとうございます。おそらく皆さん共通し、大事なことは言わずもなだけども、学校にも完成形みたいなものがあり、その完成形みたいなものを壊すためにはものすごい莫大なエネルギーが要ということで、私も大学にいて非常によく感じています。

とはいえ、やはり身近なところから、やれるところをきちんと伸ばしていくところで、それはそれぞれの学校の環境にもよる、と思います。ちょうどさっぽろこども環境コンテストでも、学校の裏に林があるとか、学校の校庭で何か野菜を育ててとか、給食の残りを減らす動きを作るとか、それぞれ工夫されてるところはまだたくさんあると思っております。

もちろん自然に触れるということは、坂本委員がおっしゃっているとおり、第一なのですが、それができないところであれば、身近なコープさっぽろのようなお店でも、そういった入口、いろんな切り口でいいから、まずは巻き込んでいくという、仕掛けをたくさん作るということと、その作ってる方々を我々、おそらく市として、集めてそれを支えていくということはきちんとしていくといいのかな、というように、伺っておりました。

それから（３）、（４）の話があまりなかったのですが、斉藤委員から環教研の取組について、7月の会議の際には立ち上げについてお話いただいたと思いますので、その後、というところで簡単に補足いただければと思います。

○斉藤委員 資料の42ページに3者の連携協定について載せていただいておりますが、今年度、連携協定をきっかけとして、札幌市の環境教育に主体的に関わらせていただいております。

まだ立ち上げたばかりなので、まず活動を軌道に乗せるというところで、行政の後ろ盾をいただきながら、また株式会社アドバコム力を生かしながらですね、お力をお借りしながら様々な取組を進めているところです。

環境局の環境教育・環境学習ガイドの表紙に書いてあります「これからもずっと安心して暮らしていくために」という、その安心というところを、今、非常に私個人としては危機感を持っています。この札幌市も、四季がすごく豊かな町だったのがこの1年、あっという間に春が終わって、猛暑が来て学校も非常に暑くて、暑さが終わったと思ったら、もう雪が降り始めて、というような、夏と冬が一気にハイスピードでやってきたように感じています。世界情勢も不安ですし、物価高もそうですし、また子どもを取り巻く環境も非常に厳しい状況になってきているということを、何とか、学校の先生たちと力を合わせて改善していきたいなというように思っています。

その下のところにある、「未来やみんなのこと、地球環境のことを考えて」というところも、まさしくここにもストレートに取り組んでいきたいと思っていて、42ページに記載してあるのですが、アドバコム主催と書いてあるのですが私達環教研も共催でENPITSU PROJECTという事業を行いました。先日1月8日に、私は教頭職なのでなかなか札幌市外に出るのが難しいので、環教研のメンバーに行ってもらったのですが、カンボジアに札幌市の児童会館の子どもたちから、家にある使っていない鉛筆を1,000本以上集めて、それを持って行って、カンボジアの貧しい、という言い方が正しいかわかりませんが、文房具にも不自由しているような子どもたちに届けに行きました。

東京の株式会社ピコトンという会社があるのですが、そちらからエコバックキットを提供いただきまして、環教研の2人の先生が授業をして、エコバック作りを一緒にしてきました。カンボジアの子どもたちは大変喜んでくれて、ものすごくいい笑顔で喜んでくれました。私達が豊かで、それを上から目線でしてあげる、ということではなくて、一緒に共生の文化を作っていくたりとか、こういうことをきっかけに一緒に環境問題、カンボジアの学校ではなかなか環境教育が進んでいないようなのですが、この取組をきっかけに、東南アジアでも環境に目を向けて、みんな地球環境を大切に、安心して暮らしていける持続可能な社会を作っていこう、ということに今回取り組んでおります。

来年はタイかなとか、ミャンマーかなとか、ちょっとアフリカにも行ってみたいとか、モンゴルにも繋がりをつくれそうだなとか、いろんな世界の国々と、毎年毎年繋がりながら、活動していきたいというように思っています。環境教育は、家庭教育でも、社会教育でも、また学校教育でも、様々なところから取り組める素晴らしい領域です。

そして私自身も中学校で部活の指導をしていますが、ここに書いてあるサステナブルウイングストーンメントという大会を主催して、札幌市環境局にも後援いただいて、この1月の冬休み中に中学校の男子のバレーボールの大会を行いました。

参加してくださった選手一人一人、全員にエコ宣言をしてもらって、関心のある地球環境問題と、あと自分が取り組んでいるエコ活動を答えてもらいまして、159人の中学生に回答いただいて、スポーツを通して環境教育にもしっかり目を向ける、ということと、夏の暑い中での運動というところが今難しい状況になっているの

で、子ども自身にも地球環境を大切にしながら、自分がスポーツを続けていける環境を自分たちで守って作っていかう、というところを部活指導を通して考えてもらう、というようなことにも、取り組んでいます。

また、令和8年度も様々な取組をしていきたいと思っておりますので、ぜひよろしく願いいたします。

○大沼会長 ありがとうございます。環境教育を起点に、国際化・国際交流やスポーツというチャンネルを通じてとか、すごく工夫の仕方ややりようがあるなど、本当にいろいろなアイデア、すごい発想かなと思います。

あと、アドバコム様、エコチルも先ほどおっしゃっていましたが、こういったチャンネルに繋いで、あるいは環境広場さっぽろの出展企業さんとか、先ほどはクリック募金の話とかありましたが、いろんな活動にどんどん繋げていくことに、課題を突破するヒントがたくさんあるのではないかなと思いました。

松田委員、お願いします。

○松田委員 (4) のア環境プラザの情報発信のところですが、SNSの効果的な発信というところで、今後は動画コンテンツの活用もされるということで、これは有効かなというように思っております。

ただこのフェイスブックとInstagramを拝見しましたが、多いからいいというものでもありませんが、いいね数が非常に少ない、一桁ということで、エンゲージメント率が低いのがありました。

なので、リールであるとか、いろいろな策があるのではないかなというように思うのですが、仕事の量もたくさんある中で、なかなかそこまでは難しいというのもわかります。

属性として、女性の35から44歳ぐらいの女性が多いということがわかったということですが、やはり誰に対して何を届けたいのかというところを明確にしないと、ほんとうに拡散するのかな、という気がいたしましたし、これを誰かに届けたいということを思ってやらないと、なかなかSNSが有効にまわらないのかなという気はしましたので、今後ちょっと検討をされるといいかなと思います。エンゲージメント率を高める、というところです。

○大沼会長 ありがとうございます。環境プラザで、いただいたご意見について今後協議していただければと思いますが、何か補足はありますか。

○環境プラザ(上杉係長) ありがとうございます。今の貴重なご意見を参考にしながら進めていきたいとは考えております。

今おっしゃられたとおり、誰に届けたいのか、ということは、昨年度から、当時在籍していた主任職の方から、全職員、スタッフに向けてそういう話はしてきており、浸透してきているのですけれども、まだそこまで技術が至ってないというところ

ころは課題なので、引き続き注力しながらやっていきたいと思います。

○松田委員 なかなか公としては難しいとも思うんですけど、やはりフォローフォロワーの関係、フォローしなとなかなか伸びないってのは、当然だと思うのです。個人アカウントのフォローはしづらと思うんですが、確実に大丈夫というアカウントをフォローしていくというようなことをしないと伸びないのかなという気はしました。

○大沼会長 ここにいる皆さんもぜひフォローしていただければと思います。ありがとうございました。

### 3. 情報交換

○大沼会長 ご意見ご提案等々は非常にたくさんいただいております、まだまだご意見はあるかと思うのですが、時間がかなり押してきてしまっているなかで、今回は任期の最後ですので、委員の皆様から一言ずつ、今日の議題やこれまで活動を含めて、振り返りのお言葉いただきたいと思います。恐縮ですが、松田委員からお願いします。

○松田委員 今日はたくさん意見を述べさせていただきました。2年間ありがとうございました。

○坂本委員 なかなかそちらに伺えないこともあって、大変申し訳ありません。長年この会議に参加させていただいていて、コンテストの審査員もやらせていただいているのですが、この10年ぐらいで一番大きく変わったなと思うのは、最初にも発言した通り、デジタルな教材とか、参加の仕方が増えたっていうところだなというように思っています。

デジタルで成長した部分もあるけれど、発表会でもどうしてもプレゼンテーションのテクニックとか、あと大人のシナリオが裏に見えたりするようなこともあって、子どもたちの気づき、センスオブワンダーというものをどうやって引き出していったらいいのかなというように感じたところです。

私自身もいろいろ学ばせてもらって感謝しています。ありがとうございました。

○先名委員 このような場で発言の機会をいただきましてありがとうございました。私も小中学生、今は上の子は高校生ですけれども、その保護者として、また家庭と学校を繋ぐ立場から参加させていただきました。

環境問題はもはや知識として理解するだけでは不十分な時代に入って、日々の選択や行動にどう結びつくかが問われる段階に入っていると感じております。子どもたちは大人の説明以上に、大人がどのように判断し、行動しているかを見ていると思いますので、だからこそ、環境教育は教室の中だけで完結するものではなくて、家庭や地域を含めた実践の場と結びつくことが重要だと考えております。

今後は学校、家庭、地域がそれぞれ役割を分担しながら、子どもたちが環境を自分ごととして考え、行動し、その結果を振り返る機会を意図的に紐づけていくことが必要だと思っておりますので本会議においても、現場に繋がる具体的な仕組み作りがより進むことを保護者の立場から強く期待して挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

○高橋委員 任期途中の担当者変更でしたので、今回で2回目の参加となりましたが、皆さんから様々なお立場で、現場の生の声を聞くことができまして、大変大きな学びとなりました。

普段の私の業務の中では、子どもたちに教える立場で行くのですが、逆に教えられたり、はっとさせられる場面も非常に多くあります。

このような貴重な場に参加させていただいたこと、業務の方にも活かしていければというように考えております。この度は貴重な機会をいただきありがとうございました。

○中村委員 中村でございます。挨拶を兼ねて、お伝えしたいことがございます。

北海道が行っている2025年度の「道民意識調査」で「子どもの体験活動の充実について」という調査項目がございました。その中で、「あなたがお住まいの地域では、子どもたちが家庭の経済的な状況や生まれた地域等に関わらず、多様な体験活動を経験することができていると思いますか」という設問がございまして、「あまり思わない」が36.6%と最も多く、「どのような体験活動が不足していると思いますか」という問いに対し「ボランティア活動、商店や会社でのインターンシップ、農業、林業、漁業といった生産体験などの社会体験活動」が54.2%と最多でした。

前職でお世話になりました元サッカー日本代表監督の岡田武史さんは、環境問題に40年近く取り組まれ、富良野自然塾でインストラクターの資格を取得され、現在、FC今治高等学校里山校の学園長を務め、今治自然塾や地域の企業と連携した環境教育のプログラムを実施していらっしゃいます。

サステナKIDS AWARDは、将来その企業で働きたいといった雇用機会の創出や、若者の地域定着にもつながる官民連携の大変良い取組だと思っております。

結びとなりますが、野外活動は人生の基盤づくりに大きな影響を与えますので、ヒグマの出没など課題はありますが、今後も子どもたちが自然に触れる機会を増やしていただきたいと考えております。

この推進会議を通して、子どもとともに大人も探究し続けていく姿勢が大切だと学ばせていただきました。2年間ありがとうございました。

○欠委員 市民委員の欠です。もともと、社会科を中学校で担当してたこともあって、環境教育が大事だということはずごく感じていて、それについてまた現場の様子など新しいこともいろいろお聞きしましたし、環境についての新しいこともいろいろと学ぶことができました。これはもう皆さんのおかげだと思っております。

この2年間大変いろいろと勉強させていただきました。これからの自分の姿勢にも生かしていきたいなと思っております。どうもありがとうございました。

○三浦委員 三浦です。2年間、いろいろな方のお話を聞く機会をいただきまして、私自身もここに参加させていただく前から副教材のところにも携わらせていただいて、環境というところの視点から教育現場を見る機会が多かったところです。

環境というのはやはり持続可能な、という視点で絶対に欠かせないものですので、今後は学校教育だけでなく、いろんな団体の方々が主催しているワークショップ等と学校のカリキュラムのどこで接点を見出してどう繋げていくかということをして

進めていくと、より効果的にそういう意識を浸透させていくことができるんじゃないかなという可能性を見出しながらも、やはりカリキュラムをどう変えていくかというハードルをどう超えるかという課題も見えてきたところで、今後も継続して、環境教育を学校の中でも進めていきたいなと思いました。ありがとうございました。

○能登委員 この場で、学校の様子を伝えていくことぐらいしかできなかったな、何か役に立てたのかなというように思いながら参加させていただいていました。

ただ、たくさんの方に学校教育についても支えていただいているということ、本当にありがたいなと思っておりまして、今後も、未来のある子どもたちに対して、たくさんのご支援をいただけたらなというように思っております。そういったお願いを挨拶に代えさせていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

○野田委員 北都中学校の野田でございます。私は今年からなのですが、大変お世話になりました。私も元々理科ですが、中学校の環境教育の本丸の教科は社会科と理科と、どちらにもあてはまるかなと思います。

理科は今年、全国大会がありまして、全国大会でも理科の中で環境教育部会があるので、全国津々浦々の環境教育の発表がありました。とはいえ、社会とか理科という教科はあるけれど、環境という教科はありません。何でかと言いますと、理科や社会だけではなく、全教科で関わらなきゃならないことだからだと思うのです。

だからこそ、環境というのは、いろんな切り口で学校教育全般にわたって関わっていかねばならない、だから環境科という教科がない、そこに意味があるのかなと思います。ですから、一つの柱として一つの視点として、そのエッセンスを各教科で取り入れながら授業構築していくことが大事になってくるかなという感じなんです。

例えばそれを集約して行うために、総合的な学習の時間であったり、ということはあるのかもしれないですが、教科横断的に環境ということには関わっていかないんじゃないかなと思います。そして先ほどから意見が出ているように、この会議にも、学校の先生だけではなく、市の方も役所の方もいろんな人がおります。教科も横断するし立場も横断するし結局はみんなで行き詰まるといっていいんだ、ということが、子どもも大人もみんな理解してくるような世の中になってくるのが大事なのかなということを感じました。

ありがとうございました。

○齊藤委員 齊藤です。私はこの委員になって、それがきっかけで先ほどの環境教育研究会を立ち上げる、そういう気持ちに繋がりました。

札幌市は環境首都宣言をしていることと、また教育委員会で雪・環境・読書の三つの柱を掲げている、やはりこの札幌市から、環境教育を全国に、そして世界に発

信していくべきだろうという思いで立ち上げた次第です。

全国大会が12月にありまして、そちらも参加したのですけれども、やはり北海道札幌市に対する先生方の期待、環境省の期待、文科省の期待が非常に大きいです。ですので、それをしっかり受け止めて、また良い活動をしていきたいなというように思っていますし、この場でもたくさん話題になっていますけど、私も立ち上げてからいろいろな方から、繋がりたい、連携を取りたい、学校で何とか出前事業をさせてほしい、というお願いが、突然電話が来たりメールが来たりするのですが、やはり学校現場はパンパンで、カリキュラムオーバーロードという言葉もありますけれども、受け入れたくても受け入れられるキャパがなかったり、人手が足りなかったり、ということが実際にあります。

ですので、子どもの学びの場が多様であるべきだと思っております、学校だけではなく、そういうワークショップとか、イベントだったり、体験会だったり、いろんな活動されている個人の方、団体の方、NPOの方、そういうところでしっかり子どもが学べる場を提供し続けるということが私は大事だと思います。

そういった方々と議論しながら、学校教育でもより良い教育ができるように、また力を発揮して努力していきたいなというように思っています。

本当に2年間ありがとうございました。

○大沼会長 ありがとうございました。最後に私からもご挨拶させていただきます。

本当に毎回、学校の先生方はもちろんのこと、いろんな立場、親として、民間企業として、市民団体として、様々な立場のみんなでタッグを組んで、一步ずつ、そう簡単には変わらないけど前に進んでいこうというそういった広がり、ネットワークがいろいろできてくる中で私自身が一番勉強させていただいてきたなというように思っております。

私自身は、会長を3期6年、その前に副会長も1期2年やっているの、合わせて8年ほど、こういった会議に関わらせていただきました。

何かできなかったことがたくさんあるんですけども、特にコロナ禍で本当に何もできなかった身動き取れなかった。皆さんおっしゃるような、肌で感じて自分で外に行って体験して、という部分が一気に失われたときの喪失感と、それでもできることを何とかしようというように皆さんでやっていったということが、ついこの前のように、あるいは遠い昔のように思ったりしながら振り返っています。

また、今回の環境教育・環境学習基本方針が2019年3月に改定されたものですが、その策定にも関わらせていただきまして、そのときにも学校はもちろんだけど学校だけではないよね、生涯を通じていろんなところで環境が変わるべきだよね、と、そのような理念を盛り込んで作って、当時のメンバーの思いも込められて、またその思いが次の委員にバトンが渡されてるといふところも一緒に見させて学ばせていただいていたというの、本当に幸せだったなというように思っております。

ずいぶん長くやり過ぎてしまったなと思っていて、あんまり実力もない者が何か

恥ずかしいなと思いながら、本当に皆さんに支えていただきながらここまでこれたことを、とりあえずは本当によかったな、ありがたかったなと思っております。なかなかやりすぎてしまったし、できるだけマンネリにならないように、いろんなことをしてきたつもりですが、やはり至らないことや変えられなかったこともたくさんあったかなと、反省も多々ありますが、次に譲りながら、バトンを渡しながら、引き続き札幌市、札幌市に限りませんが、また札幌市から他の自治体連携というものもあると思いますけれども、先ほどいくつかです札幌以外の自治体とも、というものがありませんけれども、そういったいろんなチャンネルで、また環境だけじゃなくて、もしかしたら国際交流もスポーツなど、いろんなチャンネル、広がりをどんどん作る場に、また何らかの形でお手伝いさせていただけたらなと思っております。

本当に皆様、長い間支えてくださってありがとうございました。

以上で、事務局の方にお戻しします。よろしく願いいたします。

#### 4. 閉会

○事務局（飯岡環境政策課長） それでは、これで本日の議題の方は全て終了いたします。事務局からのご連絡でございます。

本日をもちまして、今年度の会議は最後になりますが、皆様の任期は令和8年の4月までとお願いさせていただいているところでございます。

先ほどもご紹介、ご説明いたしました。現場の先生、そして委員の皆様方の貴重なご意見をいただきながら、今まさに進めている作業もございますので、個別にご相談差し上げる場面もあるかもしれません。その際はどうかまた、お力をお借りできればと思います。本日は、お集まりいただきまして、ありがとうございました。

○大沼会長 以上をもちまして、令和7年度第2回札幌市環境教育・環境学習基本方針推進会議を終了いたします。